老人問題に関する意識構造の研究（Ⅱ）

宮崎　昭夫　久留島京子　松田淳之助
田路　慧　山本　清洋

「老人問題に関する意識構造の研究（Ⅰ）」で使用したデータについてクロス集計等の処理を行ったので，その結果について報告する。

Ⅰ　クロス集計の結果

老人問題に関する意識の規定要因として重要と思われる，老人との同居の経験の有無(5)[註1.]老人と同居したことの評価（7），家庭で父母の老後が話題になるか（23），老人問題に対する関心（30），新聞の老人問題の読み方（31），を基軸として，全項目とのクロス集計を行った。[註2.]このうち主要な項目とのクロス集計の結果をカイ自乗検定し，有意水準を示すとともに，相互の関連の強さを見るためクラマー関連係数[註3.]を算出し，その結果を示したのが表１である。

表１の中で有意水準Pr＜0.01，$\sqrt{Cr}$＞0.14の項目間を関連ありとして実線で表示し，Pr＜0.1$\sqrt{Cr}$＞0.10の項目間をやや関連ありとして点線で表示したのが図１である。実線ないし，点線の結びつきが見られないものは，上述の五つの項目との結びつきが見出されなかったものである。

図１　項目間関連図

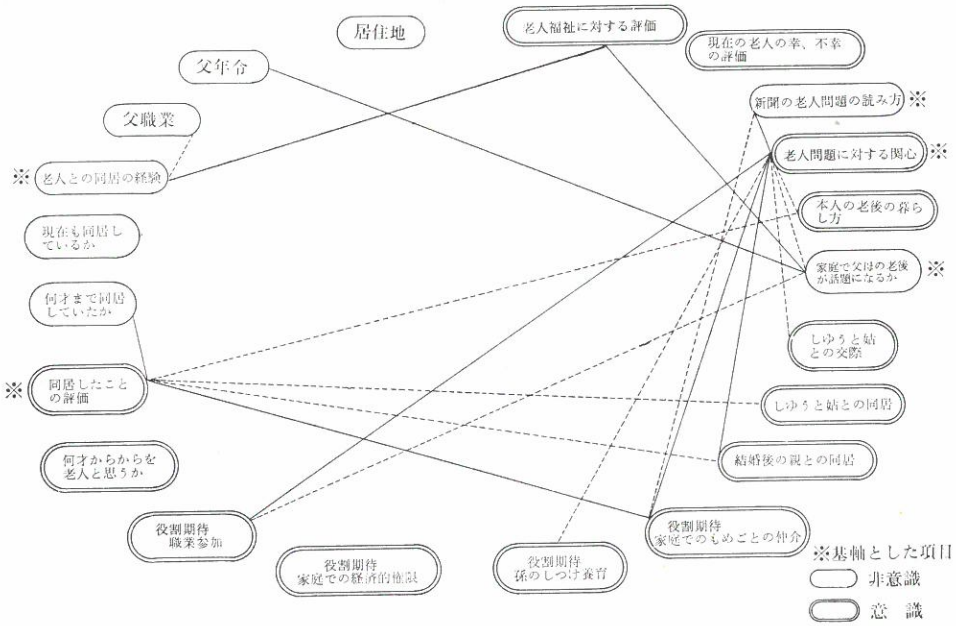

表1　項　目　間　関　連　表　(1)

		老人との同居の経験 (5)		老人と同居したことの評価 (7)	
		有意水準	$\sqrt{Cr}$	有意水準	$\sqrt{Cr}$
家族の居住地	(2)	0.1 <Pr< 0.25	0.139	0.25 <Pr< 0.5	0.143
父年令	(3)	0.1 <Pr< 0.25	0.127	Pr > 0.5	0.099
父職業	(4)	0.05 <Pr< 0.1	0.144	Pr > 0.5	0.029
老人との同居の経験	(5)				
現在も同居しているか	(6)			0.25 <Pr< 0.5	0.079
何才まで同居していたか	(6)			0.025<Pr< 0.05	0.276
同居したことの評価	(7)				
何才からを老人と思うか	(18)	Pr > 0.5	0.090	0.25 <Pr< 0.5	0.118
役割期待（職業参加）	(19)	Pr > 0.5	0.058	0.25 <Pr< 0.5	0.098
〃　（家庭での経済的権限）	(19)	Pr > 0.5	0.029	0.1 <Pr< 0.25	0.127
〃　（孫等の躾，養育）	(19)	0.1 <Pr< 0.25	0.114	0.25 <Pr< 0.5	0.106
〃　（家庭でのもめごとの仲介）	(19)	0.1 <Pr< 0.25	0.099	Pr < 0.005	0.206
結婚後の親との同居	(20)	0.25 <Pr< 0.5	0.058	0.025<Pr< 0.05	0.138
しゅうと姑との同居	(21)	0.25 <Pr< 0.5	0.093	0.05 <Pr< 0.1	0.159
しゅうと姑との交際	(22)	0.25 <Pr< 0.5	0.074	Pr > 0.5	0.094
家庭で父母の老後が話題になるか	(23)	0.25 <Pr< 0.5	0.105	0.1 <Pr< 0.25	0.133
本人の老後の暮らし方	(26)	0.25 <Pr< 0.5	0.078	0.05 <Pr< 0.1	0.138
老人問題に対する関心	(30)	Pr > 0.5	0.058	0.25 <Pr< 0.5	0.114
新聞の老人問題の読み方	(31)	Pr > 0.5	0.082	Pr > 0.5	0.089
現在の老人の幸，不幸の評価	(37)	0.1 <Pr< 0.25	0.107	0.25 <Pr< 0.5	0.110
老人福祉に対する評価	(38)	0.005<Pr< 0.01	0.178	Pr > 0.5	0.065

項　目　間　関　連　表　(2)

家庭で父母の老後が話題になるか (23)		老人問題に対する関心 (30)		新聞の老人問題の読み方 (31)	
有意水準	$\sqrt{Cr}$	有意水準	$\sqrt{Cr}$	有意水準	$\sqrt{Cr}$
0.25 <Pr < 0.5	0.115	Pr > 0.5	0.089	Pr > 0.5	0.099
0.01 <Pr < 0.025	0.142	Pr > 0.5	0.094	Pr > 0.5	0.067
Pr > 0.5	0.065	Pr > 0.5	0.078	0.1 <Pr < 0.25	0.116
0.1 <Pr < 0.25	0.105	Pr > 0.5	0.058	0.25 <Pr < 0.5	0.082
0.25 <Pr < 0.5	0.115	Pr > 0.5	0.071	0.25 <Pr < 0.5	0.115
Pr > 0.5	0.166	0.25 <Pr < 0.5	0.193	Pr > 0.5	0.159
0.1 <Pr < 0.25	0.133	0.25 <Pr < 0.5	0.114	Pr > 0.5	0.089
Pr > 0.5	0.059	Pr > 0.5	0.063	Pr > 0.5	0.079
0.01 <Pr < 0.025	0.122	Pr < 0.005	0.143	0.25 <Pr < 0.5	0.082
0.25 <Pr < 0.5	0.087	0.25 <Pr < 0.5	0.085	Pr > 0.5	0.067
0.1 <Pr < 0.25	0.099	0.05 <Pr < 0.1	0.112	Pr > 0.5	0.063
0.25 <Pr < 0.5	0.090	Pr < 0.005	0.147	0.025 <Pr < 0.05	0.121
Pr > 0.5	0.071	Pr < 0.005	0.189	0.1 <Pr < 0.25	0.109
0.25 <Pr < 0.5	0.098	0.25 <Pr < 0.5	0.086	Pr > 0.5	0.089
0.1 <Pr < 0.25	0.095	0.01 <Pr < 0.025	0.124	0.1 <Pr < 0.25	0.101
		0.025 <Pr < 0.05	0.118	Pr > 0.5	0.074
0.1 <Pr < 0.25	0.096	0.05 <Pr < 0.1	0.107	Pr > 0.5	0.070
0.025 <Pr < 0.05	0.118			Pr < 0.005	0.288
Pr > 0.5	0.074	Pr < 0.005	0.288		
Pr > 0.5	0.063	0.25 < Pr< 0.5	0.088	Pr > 0.5	0.072
Pr < 0.005	0.149	Pr > 0.5	0.087	Pr > 0.5	0.075

以下，関連あり，やや関連ありとした項目間についてその内容を説明する。

(5)—(38) 老人福祉施策について一応のことはされていると評価している者は，老人との同居の経験を有する者に多く，老人福祉施策が非常に不十分であると評価している者は，割合としては，同居の経験を有しない者に多い。

(5)—(4) 父親の職業が農業，自営業の場合，他に比して老人との同居の経験を有する者の割合が多い。しかし給料生活者であっても3分の2の近くの者が同居の経験がある。

(7)—(6) 老人と同居していたのが0～5才までの間の者は，老人と同居の評価についてどちらともいえないが圧倒的に多い。老人と同居したことをいやだったと評価している者は，16才以上まで同居していた者に多い。

(7)—(19) 老人と一緒に暮らしてみてよかったと評価する者は，家庭内でのもめごとに老人が積極的に仲介したりする役割期待を持つ者が多く，逆に，老人と一緒に暮らしたことを否定的に評価する者は，老人が家庭内のもめごとに仲介することに否定的である。

(7)—(20) 老人と一緒に暮らしてみてよかったと評価する者は，結婚しても親と子は同居するのが望ましいを選んだ者の割合が多く，逆に老人と一緒に暮らしたことを否定的に評価する者は，結婚後は親と子は別居するのが望ましいの割合が多い。

(7)—(21) 老人と一緒に暮らしてみてよかったと評価する者は，しゅうとや姑との同居について受容的な者が多いのに対し，老人と一緒に暮らしたことを否定的に評価している者は，しゅうとや姑との同居について受容的な者の割合が，よかったと評価している者に比し少い。

(7)—(25) 老人と一緒に暮らしたことをよかったと評価する者は，調査対象者自身が老人になったとき，夫婦二人で暮らしたいより，自分の子供と一緒に暮らしたいという選択が多く，逆に，老人と一緒に暮らしたことを否定的に評価している者は，夫婦二人で暮らしたいの選択が多い。

(23)—(3) 父親の年令が若いと父母の老後のことが家庭で話題になることが少なく，父親が年をとるにつれて話題になるのが増加する。

(23)—(19) 父母の老後のことが家庭でよく話題になる者は，他の者に比して，老人になっても社会の第一線で働くことを期待する者の割合が多い。

(23)—(30) 父母の老後のことが家庭で話題になることと，老人問題に対する関心には弱い正の相関がある。

(23)—(38) 父母の老後のことが家庭で話題になることが少ない者は，老人福祉に対する評価をどうしていいかわからないが増加する傾向がある。老人福祉に対する評価で，わからないを選択した者を除いて，この二項目間で計算すると $0.1<Pr<0.25$，$\sqrt{Cr}=0.098$ となり，父母の老後のことが話題になることと，老人福祉に対する評価との間には関連がない。

(30)—(19) 老人問題に対する関心と老人の職業参加に対する役割期待には弱い正の相関がある。

(30)—(19) 老人問題に対して割合関心があるとする者は，あまり関心がないとする者に比して，老人が積極的に孫のしつけ養育にあたる役割期待が多い。

(30)—(19) 老人問題に対する関心と，老人が家庭内でのもめごとに仲介する役割期待には，弱い正の相関がある。

(30)—(20) 老人問題に対して非常に関心がある。やや関心があるとする者は，結婚しても親と子は同居するのが望ましいを選択した者が，他に比してやや多い。関心のまったくない者は，親と子が別居するのが望ましいを選択する傾向が強くみられる。

(30)—(22)老人問題に対する関心と，しゅうと姑との交際について弱い正の相関がある。

(30)—(26)老人問題に対して割合関心があるとする者は，他に比して，老後は自分の子供と一緒に暮らしたいを選択した者が多い。また，老人問題に対して非常に関心があるとする者は7人中5人までが，老後は夫婦2人で暮らしたいを選択している。

(30)—(31)新聞の老人問題の読み方と，老人問題に対する関心には正の相関がある。

(31)—(19)新聞の老人問題の読み方と，老人が家庭内でのもめごとに仲介する役割期待には，弱い正の相関がある。

Ⅱ　クロス集計結果の考察

1.　本調査は老人問題に関する意識構造を種々な項目との関連で分析しようとしたものである。クロス集計の結果，荒いスケッチ的なものではあるが，図1に示した結びつきが明らかとなった。

2.　当初予測していたより，全体的に項目相互間の関連は弱く，$\sqrt{Cr}$ の値が0.25を越えたものが二つしかないことからもわかるように，今回の調査対象者においては老人問題に関する意識が構造的に十分に分化していない。

3.　基軸として取り上げた5つの項目の中では他の項目との結びつきの強さは，①老人問題に対す関心，②老人と同居したことの評価，③家庭で父母の老後が問題になるか，④老人との同居の経験，⑤新聞にとりあげられた老人問題の読み方，の順であった。

4.　老人との同居の経験は，老人福祉に対する評価との結びつきはあるものの，老人に対する役割期待や，その他の項目との結びつきは殆んど見出せず，老人問題に関する意識構造の一般的規定要因としてはあまり重要性のないことが明らかになった。老人と同居したことの評価は，他の項目との結びつきがややあり，老人問題に関する意識構造の一般的規定要因として一定の機能がある。これらに比して，老人問題に対する関心は，老人問題に関する意識構造の規定要因として，かなり重要なものであることがわかった。

5.　以上のように重要な要因である老人問題に対する関心は，非意識の項目では，新聞の老人問題の読み方，および家庭で父母の老後が詰題になるかとの結びつきは見出せたものの，これだけでは形成要因と考えることはできず，結局，老人問題に対する関心が何によって形成されているかは今回の調査からは明らかとならなかった。

6.　基軸とした5つの項目との結びつきが全く見出せなかった項目に，何才からを老人と見るか，老人に対する役割期待——家庭での経済的権限について，現在の老人の幸，不幸の評価がある。これらの意識はどのような要因と結びついているのかは，本調査では明らかとならなかった。

Ⅲ　知識と関心を軸とした分類と意識構造

老人問題に関する意識構造をさらに明確化するため，知識に関する5つの問いの結果から，全問正解を知識高位群，3～4問正解を知識中位群，1～2問正解を知識低位群とした。[註5.] 知識高位群，知識中位群，知識低位群について，老人問題に対する関心についての項目を除く各項目とのクロス集計を行い，老人問題に関する，知識と意識との関連をみた。その結果，有意な差異がでたのは表2に示した，現在の老人の幸・不幸の評価に関する項目のみで，他の項目

との間には有意な差は得られなかった。

老人問題に対する関心をみる設問である，新聞の老人問題の読み方 (31) の設問と，老人問題に対する関心 (30) の設問を組み合わせ，得点化し，２～４点を高位関心群，５点を中位関心群，６～８点を低位関心群とした[註6.]。

以上の知識と関心に関する結果を組み合わせて，調査対象者をＡからＩまでに分類したのが表３である。

表２　知識と現在の老人の幸・不幸の評価

	知識低	知識中	知識高	計
幸福だと思う	0	3	0	3
普通にやっている	18	102	42	162
不幸だと思う	14	112	40	166
わからない	18	76	12	106
計	50	293	94	437

$\chi^2=13.495$　df＝6　$0.025<Pr<0.05$

表３　知識と関心を軸とした対象者の分類

	関心高		関心中		関心低		計
知識高	A	50	D	27	G	17	94
知識中	B	112	E	105	H	76	293
知識低	C	15	F	15	I	20	50
計		177		147		113	437

この分類のうちＡは知識関心がともに高い群であり，Ｉは知識関心がともに低い群である。この極端な群であるＡとＩを以下比較してみる。

ＡとＩについて各項目とのクロス集計を行い，有意差の検定を行った。その結果，有意な差が出たのは，①役割期待――家庭でのもめごとの仲介，②しゅうと姑との同居，③家庭で父母の老後が話題になるか，④現在の老人の幸，不幸の評価の四つだけであり，他の項目とは有意差を見出しえなかった。

これらの結果を表にしたのが以下の表４～７である 。

表４　役割期待――家庭でのもめごとの仲介とＡ，Ｉ分類

	A	I	計
積極的に仲介してほしい	20	1	21
普通のときは介入せす特別大きな時だけ仲介してほしい	22	11	33
仲介などはしないでほしい	3	2	5
わからない	5	6	11
計	50	20	70

$\chi^2=10.156$　　$0.01<Pr<0.025$

表５　しゅうと姑との同居とＡ，Ｉ分類

	A	I	計
絶対に同居したくない	2	1	3
できれば同居したくない	12	4	16
どうともいえない	4	8	12
同居してもいい	26	7	33
同居したい	6	0	6
計	50	20	70

$\chi^2=11.942$　　$0.01<Pr<0.025$

表６　家庭での父母の老後の話題とＡ，Ｉ分類

	A	I	計
よく話題になる	9	0	9
時々話題になる	19	9	28
あまり話題にならない	18	6	24
全く話題にならない	3	5	8
計	49	20	69

$\chi^2=8.359$　　$0.025<Pr<0.05$

表を見ればわかるように，①知識関心高位群は知識関心低位群に比して，家庭内のトラブルに老人が積極的に仲介する役割期待を持っている。②知識関心高位群は，知識関心低位群に比して，しゅうと姑との同居を受容的である。③知識関心高位群は，知識関心低位群に比して，家庭内で父母の老後のことが話題になることが多い。④知識関心低位群は，知識関心高位群に比して，現在の老人の生活状態を，普通にやっていると判断しているものおよびわからないが多い。

表7　現在の老人の幸・不幸の評価とA，I分類

	A	I	計
幸福だと思う	0	0	0
普通だと思う	21	7	28
不幸だと思う	22	4	26
わからない	7	9	16
計	50	20	70

$\chi^2=8.396$　　$0.01<Pr<0.025$

以上から結論的に云えることは，①老人問題に関する知識と老人問題に関する意識との関連性は極めて僅かしか見出せなかった。②知識関心高位群，知識関心低位群という極端な比較を行ったが，この二者で統計的に有意味な老人問題に関する意識の差は僅かしかあらわれなかった。

このことを通して我々が行った老人問題に関する知識の設問の妥当性に対して再検討をせまられるとともに，老人問題に関する知識と老人問題に関する意識が独立的な関係であるということがどこまで一般化できるかについて関心を持たされた。又，知識関心高位群，知識関心低位群の比較からいえることは，クロス集計の考察でもふれたように，本調査対象者においては老人問題に関する意識が構造的に十分に分化していないことが再確認された。

Ⅳ　ま　と　め

「老人問題に関する意識構造の研究（Ⅰ）（Ⅱ）」を通しての総括的まとめを行う。

1.　今回の調査結果から，僅かではあるが，老人問題に関する意識構造の規定要因，意識相互の関係について知見を得た。老人問題に関する意識を規定しているものとしては，知識や経験よりも，関心が重要であることがわかった。

2,　今回の調査対象者の老人問題に対する意識は構造的に十分に分化していない。このため，明確な類型的意識構造は弱く，流動的で変化しやすいものととらえることができよう。

3.　孤老，棄老，老残等を肯定するような意識，ババ抜きといったマスコミをにぎわしているような老人観は，今回の調査対象者には殆んど見出せず，比較的老人に親和的な老人観を持っているといえよう。このため調査対象者は老人との同居についてかなり受容的である。しかし，老人に役割期待を積極的に持っているわけではなく，補助者的，消極的な役割を期待しているにすぎない。このため，老人が積極的に役割を果たそうとすると葛藤が生じやすいのではないだろうか。この点は今後の家庭における老人問題のあり方を先取りして見せてくれているものとみることができよう。

4.　以上のような傾向は，本調査の対象者が学生であり，年令，性別において限定があることから，老人問題に関する意識として一般化してしまうことには問題が多い。

このため今後は，同一調査対象者に対するパネル調査を行い，加令，社会的地位役割の変化とともに，老人問題に対する関心の変化があるか，直系家族志向から核家族志向への変化があるか，老人に対する役割期待に変化があるか等の意識の変化，および，変化を起こさせた要因

の究明をはかるとともに，性，年令，地位の異なる対象者の老人問題に関する意識構造を究明して，意識構造およびその規定要因の究明をはかりたい。

註１　以下調査項目の混同を避けるため(31)のように（　　）内に算用数字を表示しているものがある。これは，「老人問題に関する意識構造の研究（Ⅰ)」の表の番号である。
註２　クロス集計においては，無回答，非該当を除いて算出した。
註３　クラマー関連係数については，青井和夫他編「生活構造の理論」有斐閣，189頁を参照。本稿ではCrの平方根をとってクラマー関連係数とした。
註４　老人と一緒に暮らしたことを否定的に評価する者という概念には，一緒に暮らしていやだったとともに，どちらともいえないを含めている。
註５　正解が0（ゼロ）は今回の調査対象者にはいなかった。尚，年金の方式(35)については，積立方式，修正積立方式のいずれも正解として取り扱った。正解を１点，不正解，わからないを０点として調査対象者の平均点を求めたところ，3.64点であり，標準偏差は1.00であった。
註６　新聞にとりあげられた老人問題の読み方では，よく読んでいるを１点，時々読んでいるを２点，あまり読まないを３点，全く読まないを４点とし，老人問題に対する関心では，非常に関心があるを１点，割合関心があるを２点，あまり関心がないを３点，全く関心がないを４点とした。

本調査のデータ処理については，東岡山工業高校のYOHPAC－2100A（８K語）を使用した。プログラム作成，コンピューターの作動について，同校教諭尾上道範氏に全面的に御世話になった。記して謝意を表する。

昭和51年３月31日受理